

## 〔特別発言〕③

脳死をもって死と定義することは、医学に携わるものにとっては常識となりつつあると考える。心停止をもって死と考える我国の伝統的な社会通念や国民感情はなかなか変わらないとおもうが、我々は純粋に学問的立場から話しかけ、共感を得るよう努力すべきであろう。日常腎不全治療に関係している一人として、機能している屍体腎の提供は望ましいことではあるが、臓器移植の促進が主たる目的であるかの啓蒙にはいささか抵抗を感じる。脳死の問題が国会や行政のレベルでも真剣に討論されるようになったことに時代の流れを感じるが、好ましいことであると考え。

臓器移植については、腎不全患者に対する腎移植が最も広く行われ、治療として定着しつつある。新潟県においては、腎不全治療の今一つの柱である血液透析療法を全国に先がけて始め、関係者の絶えざる努力により我国

の最高のレベルに到達しているのである。また、関係各施設が緊密に連絡をとり、研究、勉強を重ねて、知識や技術の向上に努力していることは特筆に値する。腎移植については、多少の遅れはあるものの、2~3の施設で始めており、大学病院でも準備をみつめている。血液透析療法のネットワークを最大限に活用して、腎移植を軌道にのせたいと願っている。

一方、移植手術そのものは外科領域に属するが、臓器提供者の選定の問題はもちろん、移植患者の術前、術後を通じての一般状態、免疫状態、臓器機能の評価、改善などについて、いくつかの専門領域の努力が必要である。我々も一層の発表をめざして、新潟移植研究会（仮称）を発足させ、本年度内に第1回の集会を行う予定である。

新潟大学医学部第二内科 荒川正昭

## 〔特別発言〕④

## 肝及び膵移植と脳死

新潟大学医学部第一外科 武藤輝一

## I. 教室における臓器移植の研究のはじまり

私共の施設では昭和39年成犬を用い腎移植の実験を始めたが、同じ頃、本学泌尿器科学教室に於ても同様の研究がすすめられていたため、私共は肝移植の研究に移った。本研究の成果は第1回日本移植学会総会<sup>1)</sup>に於て発表し、さらに誌上に発表した<sup>2)</sup>。成犬及び豚を用いての研究は異所性肝移植から同所性肝移植へと移っていった。昭和40年、堺哲郎教授、木下康民教授を中心に新潟移植研究会が発足し、私は幹事役をつとめさせていただいた。本研究会は外科学教室図書室に於て開催され、各教室における研究成果の発表や意見の交換が積極的に続けられた。しかし、その後の大学紛争、堺哲郎教授の御逝去などにより本研究会も休会となり、さらに私共は肝移植の臨床応用が困難な実状から、昭和46年末より肝移植の研究を休むことになった。

しかし近年における腎移植をはじめとする臓器移植の世界における進歩はめざましく、新潟県内における臓器移植の将来をおもんばかり、昨年より新たに新潟移植研究会が発足し、事務局が本学第二内科学教室（主任：荒川正昭教授）におかれている。

他の講師が御発表になられない肝及び膵移植の現況について簡単に触れておきたい。

## II. 肝移植

肝移植の臨床応用は1963年 Starzl らによってはじめられたが、一昨年までに、主たる4施設に於て500例以上に施行されている<sup>3)</sup>(表1)。Cyclosporin A が使用されるようになってから、非悪性腫瘍例の1年生存率51.4%、3年生存率44.8%で優れた成績がみられ、悪性腫瘍例でも41.4%の1年生存率がみられている。対象疾患は主として成人では肝悪性腫瘍と肝硬変であり、小児では先天性胆道閉鎖症と先天性代謝異常である。